

イタリア人に生まれて

— R・J・ヴェコリのアメリカ移民史研究とエスニシティ —

山 田 史 郎

目 次

は じ め に

I 「エスニシティ — アメリカ史の無視されてきた局面」

II 「イタリア人に生まれて」

III エスニシティと階級

お わ り に

は じ め に

本稿の目的は、1960年代後半から70年代にかけて活発に展開した「新しい移民史」の代表的研究者であるイタリア系二世のルドルフ・J・ヴェコリ（現ミネソタ大学歴史学教授）の業績をとりあげ、勃興した移民史研究の背景を探ることにある。その際、かれの研究を、アメリカ史研究の文脈だけでなく、ヨーロッパ系エスニック集団の動向と関連付けて議論することを試みたい。

ヴェコリは、1927年にコネティカット州の小さな工場町ウォリングフォードに生まれた。両親はともに、イタリア中部トスカーナ州ルッカ県の小村で生まれ、1910年代に米国に移住した。ヴェコリは、地元の公立初等・中等学校を卒業し、1年間海軍で過ごした後、コネティカット大学で学士、ペンシルヴァニア大学で修士を取得した。その後1951年から4年間国務省に勤務し

た後、ウィスコンシン大学の大学院で歴史学を専攻し、1963年に博士号を取得した。1965年にミネソタ大学で教鞭をとり始めるとともに、注目すべき研究成果を著し、移民史研究の新たな潮流を生み出す中心的研究者となった。移民の境遇を客観的に分析するだけでなく、移民の人的関係の絡み合いや心性にまで立ち入り、集団の願望や苦悩までも明らかにしようとした研究姿勢——「下からの社会史」——は、多くの研究者に影響を与えた。また、同大学移民史研究センターの所長としても史料収集や研究組織・会合の企画・実行などに精力的に取り組んできたことも、特筆に値する。

同時にヴェコリは、イタリア系アメリカ人の知的指導者のひとりとして、イタリア系コミュニティの内外にむかって意見を表明する活動家としても顕著な役割を演じてきた。とりわけ、60年代末から70年代にかけて大きなうねりを見せたヨーロッパ系各民族集団によるエスニック意識への覚醒——エスニック・リバイバル——の運動では、イタリア系コミュニティのスポークスマンといえる地位を占めた。

ヴェコリが実践した「下からの」移民史研究は、60年代末から70年代におけるエスニック意識の高揚を背景において考えるならば、どのような社会的意味を持っていたのであろうか。

I 「エスニシティ——アメリカ史の無視されてきた局面」

ヴェコリの業績は、1963年に提出された博士論文からはじまる。この学位論文では、シカゴの英字新聞（*Chicago Tribune* など）や各種の雑誌、連邦・州・市の政府機関の調査・報告書、ハルハウスをはじめとする改革団体の文書、イタリア語の新聞（*L'Italia* など）・雑誌、イタリア移民諸組織の刊行物・マニュスクリプト（ほとんどイタリア語による）など、多様な史料が利用された。そのなかでも、ヴェコリがもっとも有益な史料として強調するのは、1959～60年にかけてかれがおこなった63人とのインタビューであった。そのうち37人は移民1世、26人が2世で、職業は、弁護士、ビジネスマン、新聞編集者、労働組合役員、医者、扶助団体役員、政治家、聖職者、ソーシャ

ルワーカーから、さらには食料雑貨屋、新聞販売人、日雇い労働者にまでおよんだ。ヴェコリは、さまざまな出身地域の代表に話を聞くようにつとめ、市内と郊外のイタリア人地区をくまなく訪ねるようにした。ざっくばらんな会話を通して、

同時代の文書では反映されないイタリア移民の複雑な特質についての見方を獲得できた。移住のプロセス、適応の問題、職業と生活状態などがわかった。当時の日記や手紙がないので、これらのインタビューが移住経験の主観的な次元を探ることを可能にした。〔中略〕19世紀に移住した80歳台の人が多く、記憶違いはあったが、アメリカでの最初の日々を思い出す際の感情の鮮明さと深さには心打たれた。若き日のこの大きな冒険はいまだに記憶に新しいように見えた¹¹⁾。

こうした聞き書きを含む第一次史料の分析にもとづいてこの学位論文は、19世紀の初期のシカゴに入植したイタリア人、イタリア南部からの貧農移民の到着、シカゴ下町と郊外への移住プロセス、パドロネ制度、鉄道労働と工場での労働の様子、低賃金で過酷な労働につくイタリア人労働者へのアメリカ人の偏見などを検証した。後にかれが述懐するように、消え去りつつあるように思えたイタリア人移民の姿を記録にとどめようとしたことから、ヴェコリの研究が出発した。

ヴェコリがアメリカ史学界で注目を得ることになったのは、1964年の論文「シカゴのコンタディニ〔農民〕」においてであった。この論文は、当時の移民史、というよりもアメリカ史全体の指導的歴史家であったハーバード大学歴史学教授オスカー・ハンドリンの大著 *The Uprooted* (Boston, 1951) を、イタリア移民の事例分析により、批判した論文である。ハンドリンは、移住のプロセスを、疎外、断絶、旧来の社会関係の崩壊という角度から一般化した。が、ヴェコリが調べたイタリア移民は、伝統的な社会形態や価値に執拗にしがみつき、出身村落以来の人間関係、とくに家族と同郷者の紐帯は、重要な役割を演じた。著しい工業化・都市化のなかでも、出身村落から持ち込ん

だ労働習慣や民間信仰は存続した。イタリア南部出身の農民は、伝統的な思考と行動のパターン枠組みでシカゴの生活に対処した。ハンドリンのように農民や移民についての理念的な型を構築するのではなく、移民史研究者は各エスニック集団の固有の文化的特質と、それがアメリカへの適応に及ぼす影響のありさまを研究しなければならない、と主張する。今読み返して見ると、議論も幾分雑で、内部矛盾を起こしているところもあるが、64年の時点では大御所ハンドリンに挑むマイノリティ出身の37歳の若手研究者ということもあって、かなりの衝撃をよんだことはまちがいない。移民史のみならず、下からの社会史の先駆的研究としても高く評価され、後に70年代以降に社会史のアンソロジーが編集されると、この論文は度々収録されることになる¹²⁾。

確認しておいてよいことは、この論文が刊行された1964年では、東南欧諸国からの入国者数をきびしく制限する差別的な1924年の移民割当法が、未だに生きていたということ、この法律が改定され、その差別的な割り当て制度が廃止されるのは、翌年の1965年であることである。こうした時代状況のなかで、この論文刊行の意義を考える必要もある。69年には、この論文の民間信仰の部分で、発展・拡大させた論文「聖職者と農民」を発表した。新入移民信徒に従順な服従を求めるカトリック教会に対して、出身村落以来の固有の民間信仰の伝統や、ラディカルな労働運動指導者の教会批判を解明することによって、独自の信仰生活を営むイタリア移民の姿をヴェコリは活写した¹³⁾。

これ以降、「新しい移民史」と称されるようになる一群の研究が、1960年代後半から70年代にかけて出現する。以後、ヴェコリは、「底辺から (from the bottom up)」、そして「集団の内側から (from the inside out)」、移民を捉えようとするこうしたヨーロッパ系移民史研究の第一線に立ち続け、研究の正当性を主張する役目を引き受けることになる¹⁴⁾。

まず、1970年に公刊された論文「エスニシティ——アメリカ史の無視されてきた局面」において、ヴェコリは、1960年代の黒人運動や、その後のエスニック集団の活発な動向をみるならば、「何故、歴史家たちが、アメリカの

過去におけるエスニシティの次元を無視してきたのか」と問う。「何故、合衆国史は、17世紀から今日にいたるまでアメリカ国民を特徴付けてきた人種・文化・宗教の著しい多様性の観点から書かれてこなかったのか」という問いに対して、かれはメルティング・ポットのイデオロギーとソシオロジーの存在に着目する。

メルティング・ポットのイデオロギーとは、異質な要素を同化・吸収するアメリカ社会の能力への信念である。このなかでは、惨めなごみ屑のようなヨーロッパ人でさえ、アメリカの自然環境と共和主義諸制度の圧倒的な統合力のもとで変容をせまられるとする。このイデオロギーは、建国期のクレヴクールから、19世紀末の歴史家フレデリック・ジャクソン・ターナーのフロンティア学説、20世紀初頭のシカゴ学派の社会学、そしてオスカー・ハンドリンにまで、連綿と継承され、学問的思考の支配的な枠組みとなってしまった。多元的な歴史認識を阻むイデオロギーの影響についてヴェコリは、次のように述べる。

こうして、エスニシティは、アメリカ史研究の片隅にひっそりと置いておかれるか、あるいは全く顧みられずに捨て置かれ、あたかも外聞をはばかれる身内の不祥事かなにかのごとくありつづける。そのテーマを取り上げる有能な歴史家でさえ、その存在を本来はあってはならないものであるかのように後ろめたく感じざるをえない。同化は迅速で抗いがたいものであるはずだとする期待の故に、歴史家や社会学者たちは連続よりも変化を、文化的存続よりも変容を求めた。エスニシティは消えていくと考えられたので、研究する価値ありとは考えられなかったのである。

これに加えて、エスニシティの記憶化をはばむメルティング・ポットのソシオロジーも存在した。米国で最初の歴史学博士号取得者たちはアングロ系の中流プロテスタントの出身者がほとんどで、排外主義の傾向が顕著であった。1920年代、30年代に北西欧系移民の子孫が学界入りするが、かれらが移民史を専門にするとしても、自分の集団を扱うのであって、東南欧移民を扱

うことはない。他方、戦前には東南欧系の子孫は学界に入ることをしなかったが、それは、学者を輩出する主要な大学がアングロ・北西欧系プロテスタントの牙城でありつづけたからだ。つい最近までいくつかの歴史学科は、方針として黒人はもとより、カトリックやユダヤ人を雇わなかったことはよく知られている。

第二次世界大戦後、カトリックやユダヤ系の学生が大勢大学に進むようにはなった。しかし、これらの東南欧移民2世、3世によるエスニック研究の勃興は生じなかった。なぜか。

ヴェコリによると、高等教育はアメリカでもっとも効果的な文化変容（非エスニック化）のエージェントのひとつであり、その主要な機能は、あらゆる出自の才能ある若者をアングロアメリカの中核文化に同化させることである。研究の道を志すものに対して、大学はエスニシティからの離脱を促す。知性的生活と理性の尊重に自らをささげるアカデミック精神を受容したインテリとして、かれらは子供時代に自分を取り巻いていた偏狭な集団根性や部族的な忠誠心を拒否する。多くの大学院生は、エスニックなショーヴィニズムや祖先崇拜主義のレッテルを貼られることを恐れ、自己のエスニシティに関わる研究テーマを避けようとする。長期にわたって劣等の烙印を押されてきた東南欧移民の子孫にとって、出自と結びつく事柄からできるかぎり距離をおき、可能な限り体制に同化することが肝要であると思われた。こうした事態は、エスニック集団のあり方に甚大な影響を与えてきたと、ヴェコリは言う。「エスニシティと袂を分かった学者たちは、集団の記憶を残そうとするランクアンドファイルの人々の試みを、冷淡に突き放し、エスニック集団の側は、同化した学者の紳士気取りでよそよしくて冷淡な態度に憤る。」⁵¹ここで注目すべきは、ヴェコリが、純粋に学問的な観点からのみ、民族多元的な歴史認識が抑圧されてきたことを論じているのではなく、集団の問題としてエスニシティの記憶化が抑止されてきたことを取り上げていることである。このことを、かれは、自分の生い立ちを振り返ることによって、再度提示することになる。

Ⅱ 「イタリア人に生まれて」

ヴェコリは、46歳になった1973年に、ヨーロッパ系移民のエスニック覚醒を特集テーマとした雑誌において、自伝的エッセイ「イタリア人に生まれて」を発表し、「私の自伝はエスニシティの意味を解明しようとする私の仕事にとっての第一級の史料である」と述べる。ここでかれはまず、「自分の世代のイタリア系アメリカ人の多くが経験した、しかしめったに語ることがなかった記憶」、「イタリア系アメリカ人の心の奥底に潜む記憶」の糸を手繰り寄せることから始める。それは、とりもなおさず、両親の世代が経験した最下層の労働と搾取と差別の記憶であった。

コネティカット州の工場町で育ったわたしの最初の記憶は、陰鬱な大恐慌時代のそれだ。父は建設労働者で、長く失業していた。母は衣服の搾取工場で働き、家計に貢献した。小麦粉やミルクやコンビーフをもらうために、姉や私は配給の列に並んだ。しかし、決して欠乏生活を強いられたわけではない。空腹のまま床についた経験はなかった。子供に衣服と食事を与えるために両親が懸命に奮闘していた。〔中略〕父は、レンガの担ぎすぎで肩をぼろぼろにして夜帰宅することが多かった。これらは、私の世代のイタリア系アメリカ人の多くが経験し、しかしめったに語ることがない記憶である。我々の移民の親たちは、20年代・30年代の、工場労働者・炭鉱夫・土木作業員などの搾取されたプロレタリアートであった。搾取されただけでなく、外国人として、DagoやWopと呼ばれさげすまれた。〔中略〕

何千人ものイタリア移民が工場災害や鉱山事故で死んだり、障害者となった。スラヴ人とともに、かれらはアメリカの工業力の成長に肥料を与えた糞であった。こういう身体の傷に加えて、心の傷があった。多くのアメリカ人の見方では自分たちはホコリ以下と考えられていると知っていたから。

アメリカの底辺を支えた被差別集団であったがゆえに、「われわれは、いかに微小なものであろうと、得たものを守るのに必死であった。死ぬほど苦労して得たものであったからだ。」

自伝的叙述の冒頭で語られる労働と搾取と差別の記憶について立ち現れるのは、同化を志向した若き自分の記憶である。

成長するにつれて、移民世界とは遠く離れた別の次元のアメリカ社会に気づくようになった。町には有名な私立の寄宿制進学校プレップ・スクールがあったし、イエール大学はほんの数マイルのところにあった。これらは、私の想像のなかでは、別世界、労働者階級のイタリア系少年の手には届かない富と権力の世界の象徴となった。しかしそれらは、文化的洗練さとカッコいい自信にみちた（と私が想像していた）あの WASP の世界に近づこうとする私の願望を刺激した。私の近隣からは、大学に行く少年よりも、矯正施設に行く少年の方が多かったが、私は早くから、あの世界に上るはしごととして高等教育に視点を定めた。〔中略〕

私の学校教育は私の起源に関してただネガティブな感情のみを私の中に植え付ける役目を果たした。無視によって、また時にはあからさまに、私は自分のイタリア人性の中に価値あるものは何もないと感じさせられた。小学校から大学院まで、一度足りとも、イタリア語が堪能であるという事実が長所であると言われたことがなかった。

これは、黒・茶・赤色の有色人種の場合と同様に、移民児童に共通した体験であった。非人間的でおろかなアメリカ教育システムは、アウトサイダーや、貧困者や、外国人や、人種的・文化的に異質な人の子供たちの多くの世代の教育に失敗している。所詮、学校には期待すべきではない。アメリカの学校とは、同化し、標準化し、多様性を消し去るように意図されているのだから。従順で、野心的なイタリア系であった私は、熱心に同化しようとした。進歩と啓蒙というリベラルな信条を抱いた。労働者階級エスニックのくすんだ外観をけなした。コスモポリタンで洗

練されたインテリをみならって自分を作ろうとしてきた。

しかし、熱心に同化を志向した自分の心のなかに、いまひとつ別の感情が宿っていたことを、ヴェコリは思い出す。

自分がそうあろうとしてきたこと、そうであると信じてきたことの多くが、真の自分、現実感覚、価値、忠誠心などと食い違っていると自覚するように徐々になってきた。正真正銘の WASP になれなかっただけでなく、そうなりたいとも思っていなかったのだ。

それは言い換えると、

自分がイタリア人に生まれついたこと、そしてこの境遇が私の人生に甚大な影響を与えてきたことを、いつも気づいていた。アイヴィー・リーグの大学や、国務省で、「彼ら」のうちのひとりを装ったときでさえ、三つ揃えのグレイの毛織のスーツの下ではイタリア人少年の心が脈打っていることを知っていた。

それゆえ、ヴェコリは「大学院に進んだとき、ある種の内的なおさえがたい力に動かされて、私は当時としては、旬のテーマではなかった、イタリア移民で論文を書くことをきめた。」

私自身の自伝から提起される問題——アイデンティティ、集団生活、同化、社会政策の問題——は、私の歴史研究のなかで取り組もうとしてきた課題となっている。たぶん、私の研究が自伝の考察を確証してきていることは驚くことではない。言い方を変えると、自分自身のエスニシティを受け入れ、確かめることによって、私はアメリカ史に関する新しい視点を獲得した。その視点は、革新主義的解釈やコンセンサス解釈にもとづく旧来の解釈から自分を解放してくれた。このことは、もちろん、私についての特殊な発見ではない。同じような個人的、学問的洞察にたぶん動かされて、「新多元主義」の学派が、伝統的なアメリカ社会観に挑戦すべく立ち現れている¹⁶⁾。

エスニシティの再認識とは、とりもなおさず、搾取され苦勞しつつ生活を維持し切り開いた移民とその子供たちの生き様へのまなざしに根ざしたものであること、その移民が生きた過去を直視することによって、それまで抑止されてきた新たな世界観を手にする可能性が開けることを、ヴェコリは、自分の記憶をたどることで「証明」したのである。エスニシティの再認識が、旧来にはなかった新たな視点をもたらすという主張は、エスニック・リバイバル運動をささえる根拠になっていく。

移民によって生きられた過去への視点は、それを可能にする材料、つまり史料が不可欠となる。ヴェコリは、1965年にミネソタ大学の歴史学科に職を得ると同時に、設立されたミネソタ大学の Immigration History Research Center (IHRC) の所長となり、精力的に東南欧系移民の史料の収集に乗り出す。IHRC の設立に関して、かれは1991年にこう述懐している。

今日驚くべきことは、入国者がピークに達した1880年代から1920年代の重要な時期の移民に関する歴史資料を収集する体系的な努力がそれまで全くなされてこなかったことである。文化的近眼を患うアメリカの図書館や文書館は、これらの移民の新聞や史料やマニュスクリプトを重要な歴史的価値をもつものとは、みなさなかった。英語で書かれたり出版されていないものは、残すに値しないという前提があった。結果として膨大な量のこうした史料が廃棄された。〔中略〕いったんそのような史料を全国で探してみると、民家の屋根裏や地下室、ガレージや納屋、組織の会館や教会、印刷所や事務所にうずたかく積まれたマニュスクリプト、書籍、会計簿、新聞、雑誌の塊や束を見つけ出した。いったい何トンに及ぶそのような史料が梱包されて IHRC に運送されたことか。もし、IHRC が存在していなかったなら、今収蔵されている史料はどうなっていたことか。移民によって生み出された文書のほとんどがそうであったように、ごみ屑となるか、焚き火になっただろうか。この史料保存の主たる功績は、だれもそんなものに目もくれなかったときにそれらの史料を保存しておこうという洞察力を持ち、歴史研究に供すべく遠方のミネ

ソタまでそれらを送り届けることを厭わなかったエスニックの組織や個人によるものである⁷⁾。

小さな教会の記録が、名も無き労働者の手記が、相互扶助クラブの会計簿が、れっきとした歴史研究の対象となりうる意味あるものとなった。史料の収集と保存は、ヴェコリが従事する歴史研究にとって不可欠であるのみならず、移民集団に対して史料の歴史的意味を教え、それらを IHRC に寄贈することを通してエスニシティの意味を確認させることにもなった。結果として、IHRC は東南欧系エスニックの研究のための最大規模の所蔵史料を誇るまでになり、マニュスクリプト史料ファイルは長さにして4,000フィート以上、書籍とパンフレットは約25,000冊、新聞と定期刊行物は4,000種類を数えるまでになった。IHRC はまた、研究者のみが利用する文書館ではなく、各移民集団による伝統芸能や民芸作品の展示をも実行する博物館に似た機能を併せ持つことで、研究と集団をつなぐ方向性を示している。

1966年、ヴェコリは、イタリアの歴史・文化・現状に関心を持つイタリア系の研究者・非研究者の学術的組織アメリカ・イタリア人歴史協会 American Italian Historical Association の創設に中心的メンバーとして関与する。この組織は、学者だけの議論にとどまらずに、イタリア系に関する史料の収集・保存、研究の公開をも促進する全米的なイタリア系コミュニティ組織となっている。

Ⅲ エスニシティと階級

イタリア系市民のエスニシティへの覚醒と連動した移民史研究を追究するヴェコリは、イタリア系のエスニックな要素が同化によって消えることなく、60年代、70年代にも存続・継承されていることを強調する。1977年の論文は、呪術・魔術を核とするイタリア系の民間信仰の宗教世界が、根強く残っていることを示し、78年の論文では、家族・コミュニティ・文化・政治の領域においてイタリア系の遺産が前向きに受け継がれていることを説く。この2つの論文は、ヨーロッパ系アメリカ人のなかでは、もっとも社会的流動性が小

さくて遅く、守護聖人の祝祭に代表されるような伝統的様式にこだわるイタリア系の生活世界が、産業化・都市化社会の官僚的で画一的な規律や価値観が支配する社会にあって貴重な意味を持つものであることを示した。いわば安定した人間同士の結びつきを第一におくイタリア系の特性に意義を認める内容であり、単なる学術論文の域を越えて、イタリア系コミュニティにとって現実的意味のあるものとして受け入れられたのではないか。エスニック・リバイバルの主張に、学問的な根拠を提供したと言っているかもしれない⁸⁾。

問題は、当時からすでに認識されていたし、今から振り返るとさらに明確になるのだが、イタリア系をはじめとする白人エスニック集団の自己主張が、しばしば、差別的状態の改善を求める黒人の運動と衝突したことであり、ヴェコリがこの点をどのように認識していたかということであろう。60年代・70年代には、住居・学校教育・雇用において、それまでの差別的隔離を改めるために、全米の各地の都市で様々な試みが計画され、また実行に移された。そうした人種間統合の社会政策に対して、もっとも戦闘的に反対したのが、アイルランド系、イタリア系、ポーランド系などの、カトリックのヨーロッパ系民族集団であった。こうしたヨーロッパ系民族集団の自己主張は、したがって、白人の人種主義を隠す煙幕にほかならない、と当時から指摘されたし、現在もかかる評価が下されることが多い。ヴェコリはこの問題をどのように捉えていたのであろうか。

かれは、差別的隔離の是正への敵対が、イタリア系の場合、家族やコミュニティの独特なエスニック的特質から発していると認識していた。再びかれの自伝的エッセイ「イタリア人に生まれて」にもどって見てみよう。

プロテスタント倫理と上昇願望は、我々の伝統ではなかった。父は、私が散髪屋か靴屋になることを欲した。生涯日雇い作業員であった父の見方では、職人になることが重要な上昇のステップであった。他のエスニック集団と比べて、イタリア系は、ブルーカラー層にながくとどまっている。〔中略〕機会が制限されていたこともあるし、偏見の障害が実際に高かったこともあるが、個人の向上よりも家族の団結を賞賛するエスニッ

くな価値のせいでもあった。教育はしばしば親のコントロールをつぶす異界の悪としてみなされたし、実際にそうであった。イタリア系は、ユダヤ人やギリシア人や日本人ほどに「達成症候群」にとらわれておらず、そのことはイタリア系の職業や地理的な移動が相対的に少ないこととともに、家族や近隣の安定度が高いことをも説明する。〔中略〕

〔アメリカの主流から隔たった〕エスニック居住区では、住民構成の変化や都市計画に対して、驚くべき抵抗が生じている。そのエスニックな（農民的）特質は、家族と近隣への激しい執着のなかで生起する。小さな前庭にマドンナ像を置き、窓にイタリアの旗をかかげた長屋、イタリアのごちそうであふれる食料品店、社交クラブ、教会、これらがかれらの社会世界である。何故、郊外の広い空間に移動する流れに同乗しないのか。それはひとえにそのための資力を欠いているからではなく、行政サービスの低下や犯罪の増加やその他の病める都市の悪弊すべてにもかかわらず、かれらをつなぎとめる昔からの近隣の社会関係の緊密な紐帯への執着の故である。他の白人エスニック集団に比べて、近隣にとどまったイタリア系は、唯一の居残った白人として、多くの都市で黒人との抗争に縛られている¹⁰。

安定した居場所の中で親密な人間関係を守りたいというイタリア系の思いに、まず注意を促す。そのうえで、そのささやかな願望すら脅かしつつある都市の諸問題を指摘する。1978年に雑誌『エスニシティ』に掲載された論文「イタリア系アメリカ人の成熟」で、ヴェコリは隔離是正＝人種統合に対する集団内部の思いを代弁しようとする。

公民権とブラックパワーの運動は、イタリア系アメリカ人、とくに都市部のブルーカラーのかれらには、直接的な脅威に感じられた。雇用・住居・学校への参入を求める黒人の要求は、イタリア人を驚かせ、怒らせた。黒人は、自分たちの住居、自分たちの仕事、自分たちの学校を狙っていると思われた。「俺たちが今まで釈迦力に働いてきた結果手に入れ

たものを、ニガーたちは銀のお皿にのせて届けてもらえると思っている」というのが、リトル・イタリアの一般の意見であった。こうした福祉すべてに誰が金を支払うのか？増税の負担を感じたかれらは、アメリカの人種問題のつけを自分たちが支払わされていると感じた。われらの祖先が奴隷を所有していたわけでもないのに。

突然に、イタリア系アメリカ人は、コチコチ頭のタカ派保守反動家として登場し、キング牧師に石を投げつけ、平和運動家を殴りつけ、自警団を組織する。しかしイタリア系アメリカ人はたんに、偏見から脱しようとする黒人に反対しているのではない。むしろイタリア系自身が、都市の荒廃、公共サービスの悪化、暴力や犯罪の危険、公立学校の混乱によって傷ついている。多くのブルーカラー家族は、インフレと雇用不安に直面し、貧困線より上で生きるのに四苦八苦している。退学と麻薬中毒は、イタリア系若者の間に蔓延している。リトル・イタリアに取り残されたイタリア系は、見捨てられ、無力であると感じている。どの役所も、彼らの問題に関心を払わない。黒人ゲットーに焦点を当てるが、リトル・イタリアの差し迫った問題を見捨てる60年代の連邦政府の計画が、イタリア系アメリカ人の敵意を高めた。自分たちの存在自体に気がつかないエリートの無視や無関心によって、イタリア系アメリカ人は反動に駆り立てられている¹⁰⁰。

ようやく都市の一角に安定した居場所を確保できたと思った矢先に、自分たちからは遠く離れた政府やリベラルな中流市民の思惑により、イタリア系が黒人への譲歩を迫られている、とする認識が示されている。かつては過酷な労働と搾取に苛まれ、今も下町で都市問題の多くを背負い込まされているイタリア系の過去と現状に、正当な社会の目が向けられていないことに、問題の根源があることを力説する。

70年代にヴェコリが著した実証的研究のほとんどが、イタリア人移民の労働者と労働運動をテーマとしていたことは、イタリア系がおかれた状況への

かかる認識と深く関係していると考えられる。1977年の論文「イタリア系アメリカ人労働者, 1880-1920」, 1980年の論文「アンソニー・カプラーノと1919年ローレンスのストライキ」, 1981年の研究報告「ミネソタ鉄山地域のイタリア人」, 1983年の論文「米国労働運動におけるイタリア人移民, 1880-1920」などにおいて、ヴェコリは、工場や鉱山におけるイタリア人移民労働者がおかれた境遇を概観し、労働運動を通して労働者の地位改善に主体的に取り組んだイタリア人移民活動家の姿を活写したのである⁹⁾。

イタリア系自身によっても忘れられようとしている、また社会から抹殺されようとしている、かかる移民労働者階級の記憶を「底辺から」掘り起こし、人びとのまにに提示したことは、歴史研究として意味があるだけでなく、当時のイタリア系が置かれている状況への「適切な」見方を、アメリカ社会に——そしてまた、イタリア系自身に——教え諭す意図をもちえていたという点で意味があった。ヴェコリにとって、イタリア人移民労働者の歴史は、かれを含むイタリア系アメリカ人がエスニシティを再発見し、そのエスニシティを正当なものとしてアメリカ社会に承認させるための、決定的に重要な根拠となっていたといえる。

お わ り に

ヴェコリは、1979年に、『アメリカン・スタディーズ・インターナショナル』誌上で、研究動向の評論を中心とした「アメリカ移民史の復興」と題する論考を発表し、「アメリカ史における人種・民族・宗教の役割に関する本や論文や学位論文の文字通りの洪水が、われわれの周りをとりまいている。エスニックなテーマに関する会議、学会発表、科目が驚くべき割合で広がる」ようになったことを、誇らしげに記す。「政治、芸術、日常生活において、高揚したエスニック意識が社会に行き渡った。マイケル・ノヴァクが見るように、70年代はエスニックの10年間であった。この未経験の現象に困惑しつつも、歴史家と社会学者たちは、合衆国におけるエスニック多元主義の性質と起源についての多角的な考察を開始した。」ヴェコリはこう述べて、研

究の現状と、研究の基盤となる研究所、史料・文書施設の整備と歴史協会等の活動を紹介している。かれが導いた結論は、「多元的な観点がアメリカ史研究の基本的なパラダイムを変えたことは明らかである。これは、過去の歴史的研究との根本的な断絶であり、アメリカ人の経験についての解釈において多民族、多人種、多言語となる合衆国史の書き換えを予感させる。」¹²

しかし、このように謳いあげたヴェコリを待ち構えていたのは、のちにかれ自身が「テルミドールの反動」と呼ぶことになる80年代の変化であった。共和党政権を背景にした「新保守主義」台頭のもとで、国民的統一への強力な指向が強調され、社会の分裂をもたらしかねない「部族的」主張への批判が高まった。学界においても、多元的観点への批判が提起され、「メルティング・ポットへの回帰」現象が一部に生じた。他方、一部の多文化主義者（multiculturalists）は、ヨーロッパ系白人のエスニシティを、アメリカ社会を貫く人種のパラダイムを封印する反動的意味を持つものとみなし、ヨーロッパ系移民史研究そのものを問題視する見方も現れることになる¹³。

こうした新たな局面にヴェコリがどのように反応したのかについては、別稿で粗描したので、ここでは触れないが、次の点を指摘して、本稿を閉じることにしたい¹⁴。ヴェコリが提示したイタリア人移民労働者像はきわめて静的であり、アイデンティティや人的紐帯の変容や拡大という展望が欠落していたように思える。イタリアの出身村落や出身地方ごとに形成されるローカルな帰属意識がきわめて根強く移民によって保持されたことをヴェコリ自身が強調するけれども、とりわけ統一国家との関係が希薄であった南イタリアやシチリア島出身の移民とその子孫の間で、いかにして「イタリア人」というアイデンティティが共有されるにいったのかは、明らかにされない。また、移民一世の底辺労働から二世のブルーカラー・下級ホワイトカラー労働への推移のなかで、イタリア人の人的結合関係に生じる変化も、十分には説明されなかった。同様に、60年代以降に隔離は正や人種統合に反対する過程で、アイルランド系やポーランド系などの他のヨーロッパ系集団と協調することを通じて、イタリア系の間にも白人エスニックとしてのアイデンティ

ティが構築されつつあったことなどへの視座が提示されない。「白人になった」ヨーロッパ系移民の過去を射程に入れた視点でなければ、人種性を強調するパラダイムとの対話は成立しにくいように思える⁹⁹。

注

- (1) Rudolph J. Vecoli, "Chicago's Italians Prior to World War I: A Study of Their Social and Economic Adjustment," (Ph. D. dissertation, University of Wisconsin, 1963), p. 466-467.
- (2) Vecoli, "Contadini in Chicago: A Critique of The Uprooted," *Journal of American History*, 51 (December 1964): 404-417.
- (3) Vecoli, "Prelates and Peasants: Italian Immigrants and the Catholic Church," *Journal of Social History*, 2:3 (Spring 1969): 217-268.
- (4) Vecoli, "European Americans: From Immigrants to Ethnics," in William H. Cartwright and Richard L. Watson, eds., *The Reinterpretation of American History and Culture* (Washington: National Council for the Social Studies, 1973), pp. 81-112.
- (5) Vecoli, "Ethnicity: A Neglected Dimension of American History," in Herbert J. Bass, ed., *The State of American History* (Chicago: Quadrangle, 1970), pp. 70-88.
- (6) Vecoli, "Born Italian: Color Me Red, White, and Green," *Soundings*, 56 (Spring 1973): 117-123.
- (7) Vecoli, "Foreword," in *The Immigration History Research Center: A Guide to Collection* (New York: Greenwood, 1991); Vecoli, "The Immigration Studies Collection of the University of Minnesota," *The American Archivist*, 32 (April 1969): 139-145.
- (8) Vecoli, "Cult and Occult in Italian-American Culture: The Persistence of a Religious Heritage," in Randall Miller and Thomas Marzik, eds., *Immigrants and Religion in Urban America* (Philadelphia: Temple University Press, 1977), pp. 25-47; Vecoli, "The Coming of Age of the Italian Americans: 1945-1974," *Ethnicity*, 5 (1978): 119-147.
- (9) Vecoli, "Born Italian," 119-121.
- (10) Vecoli, "The Coming of Age of the Italian Americans," 142-143.
- (11) Vecoli, "Italian American Workers, 1880-1920," in Silvano M. Tomasi, ed., *Perspectives in Italian Immigration and Ethnicity* (New York: Center for Migration Studies, 1977), pp. 25-49; Vecoli, "Anthony Caprano and the

- Lawrence Strike of 1919,” in George E. Pozzetta, ed., *Pane e Lavoro: The Italian American Working Class* (Toronto: The Multicultural History Society of Ontario, 1980), pp. 3-27; Vecoli, “Italians on Minnesota’s Iron Ranges,” in Vecoli, ed., *Italian Immigrants in Rural and Small Town America: Essays From the 14th Annual Conference of the American Italian Historical Association, 1981* (New York, 1987), pp. 179-187; Vecoli, “The Italian Immigrants in the Labor Movement of the United States From 1880-1929,” in Bruno Bezza, ed., *Gli Italiani Fuori d’Italia* (Milan, 1983), pp. 257-306.
- (12) Vecoli, “The Resurgence of American Immigration History,” *American Studies International*, 17 (Winter 1979): 46-66.
- (13) 辻内鏡人「多文化主義パラダイムの展望」油井大三郎・遠藤泰生編『多文化主義のアメリカ』(東京大学出版会, 1999年), 59-85ページ。
- (14) 拙稿「米国移民史研究の来歴——イタリア系歴史家R・ヴェコリの観点」『同志社女子大学総合文化研究所紀要』第18巻(2001年), 54-62ページ。
- (15) George J. Sanchez, “Race, Nation, and Culture in Recent Immigration Studies,” *Journal of American Ethnic History*, 18:4 (Summer 1999): 66-84; Vecoli, “Comment: We Study the Present to Understand the Past,” *ibid.*, 115-125.